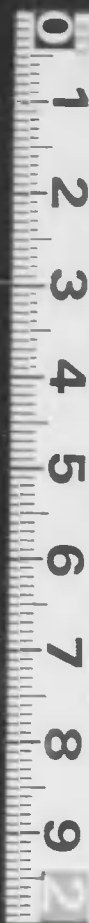


寫眞週報

情報局編輯

九月廿三日 第二冊九號



闇も帝都の行爲

九月八日 警視廳經濟部員と同行撮影



てつうを胸に「除染検でれそ るへ答と「んせまりあ」りきつは とく訳と「かいな」てしそ いなめて出然全は物果はに先店
たり賣賣情るた然歴……山のめ詰箱め詰箱 とる入に奥歩……
いとひ るみてれま積りしつき がどな梨洋西 ウドフ 紀紀世十二 ゴンリ……たつあ たつあ とるみてし製奇を室下地に更
店賣果〇〇の面方橋本目 一からだのいよでれこ るみてけかを車拉昇一に諸飢物果の都密が爲行正不なんと だみし惜賣



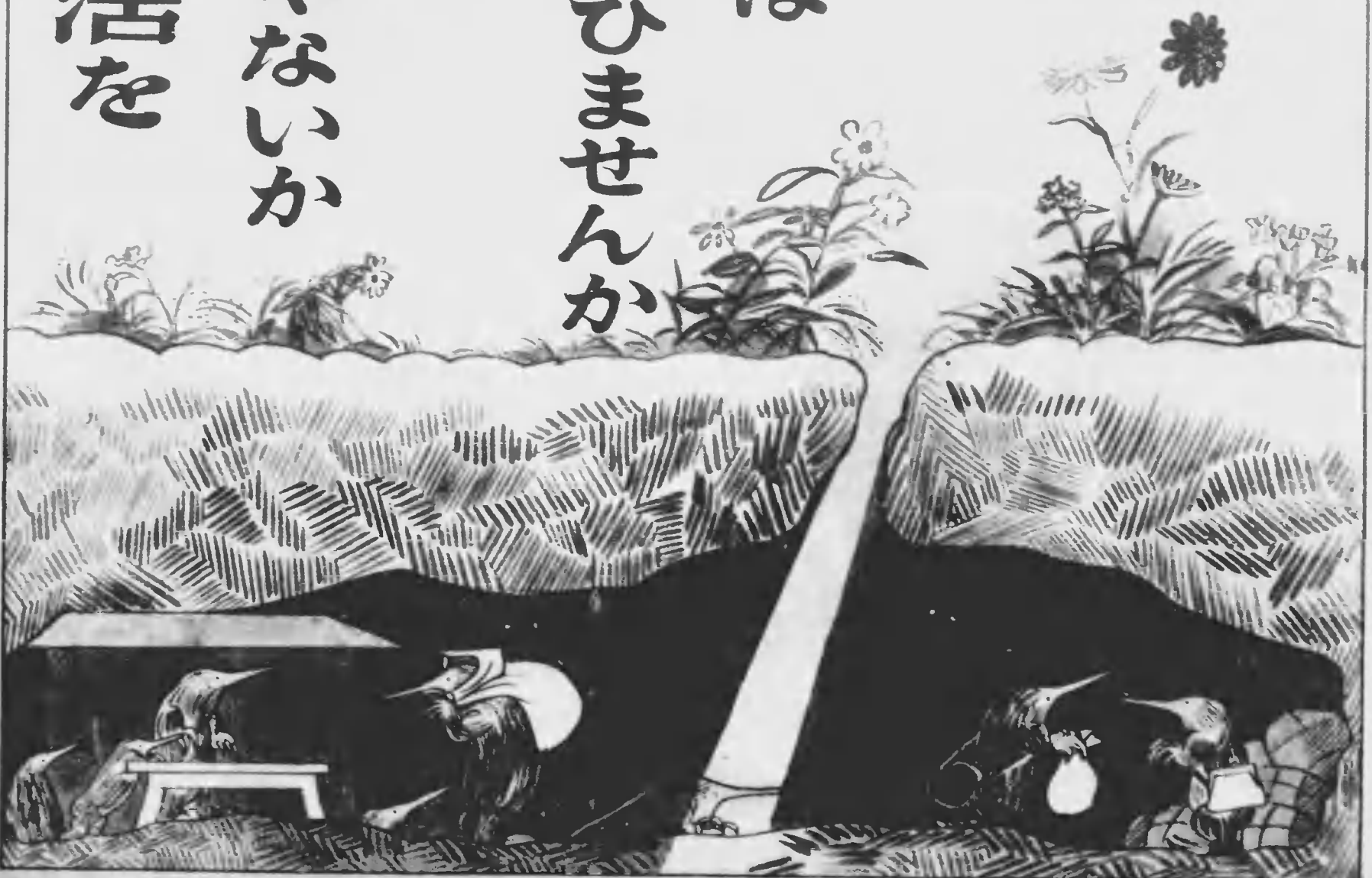
時立の札

第四十四号

（日曜水）

昭和十七年九月廿一日

闇で賣つたり 闇で買つたり
それで生きてゆく人達の生活は
『もぐら』のやうなもんだと思ひませんか
明るいつころへ出てきたまへ
そして一緒にやつていかうぢやないか
明るい取引で 明るい生活を



親切八百屋と ほゑ、むー列

下欄のやうに帝都の闇にレンズを向けた「寫眞週報」のカメラは、やるせない憤懣に溢面をつくつた。
だが、經濟警察官と共に明るい家、正しい店を訪れたわれらのカメラは……
明るい。買入人も、買入人も、顔一杯に明るい微笑の氾濫さうだ、この姿だ。
皇國民の本當の姿だ……
この姿、レンズが捉へたこの眩しいばかり明るい、勝ち誇る様子を、日本國中の人たちよ、守り通さうではないか



八百屋さんの真実。行列はしてゐるけれど敵には露骨な時間がかかるといふ、あまり早くから並ばないやうに親心をなめてゐる。

今日の大根は大きいので、すゝと泥なぞがついてゐません。西之助さん。



本日入荷時間
第一回午前十一時頃
第二回午後二時頃

一方に闇とする悪徳の業者があるかと思へば、一方にはかうした寺澤さんのやうに親切な八百屋さんがある。
東京市浅草區内の市物商寺澤さんは仕事の手を一寸休めて
「早い話が、自分一人では生活はできません。私が困ることは他人さまも困ることだと思ひます。私の所は八百屋ですから青物はありますが、魚はありません。石巻も豆腐も買はなければなりません。買ふ苦労を思へばお客さんに不親切なことはできません。私のところは特

闇！ かしも帝都に 行の爲

警察官の經濟警察官と共に「寫眞週報」のカメラが帝都の闇を衝いた。そしてレンズが捉へた帝都の暗い眞實がこゝに御覽の通りの眞實なのである。
これでよいのか
闇はとりもなほさず、國を賣る行為なのだ
十萬方英鎊が築いた大東亞建設の基礎をあとから切崩してゐる行為なのだやがて僕らの孫が、その孫が、東亞の新らしい平和を享受する時、その孫たちに頼むけならぬ行爲、それが闇なのだ……
江戸ッ子よ、大日本帝國帝都の業者よ、市民よ、君たちからまづ自衛しようではないか
レンズは明るさを欲してゐる
業者も、消費者も明るく、正しく、強く、戦時下の生活を切抜けていかうではないか



はに屋部の奥がた 干はに頭店 かと店賣果某の面方谷波りはやめ話 がるゐてつ ……りかば煮個にれそ メツナ干にナナバ



んき皆はでれこ りほとこのこれには庫倉 になれそ
いまれはかうは者産生たつ作とうはらもてべ食に
いとすまり賣てし出に店々箱一 箇數十二が箱註化の也終十三圓三合せめ話
…るゐてつなにとこいなければしてに對絶ばれけなで緒一と賣ラバは賣販せ合



このカボチャはおいしいです。えいと四百七十文か——親切八百屋の主人公福太郎さんの量目は正しい

えいと煮子が二十銭、胡瓜が九銭、玉葱が十二銭、しめて四十一銭。曲つた腰もシャんと伸ばしてかつさんの腰を



少も少百 がるれらへ歸てつ買でん男び者はんさ母おやんさ父お出が品外格類はたま 品悪粗なんと 物品ふいとるけ破が類ばけで屋靴の面方川神——靴の者業び及者産生 はのる創

目量いつ といなでうさ とこくおてせさりきつは は小衣格價屋物漬の面方谷下——るなにちがしこおをどな反違の格價や足不で



〇「娘婦の方にはお先に買います」の横にもはつきりと娘に立ちん坊をさせる親切心がしみ出てゐる。それに価格の表示も明瞭です

に親切なことをなしてゐませんが、腰の曲つたお爺ちゃん、お婆ちゃんまでが店に出て、少しでもお客様に付いていたく時間を少なくしようという一家四人が賣手に立つてゐます。お客さんは行列しますか。一回の荷さばきは二十分程度で終つてしまひます」と主人公福太郎さん（四四）が語るうちに、他の賣手父西之助さん（七〇）母かつさん（六九）妻しげ子さん（四一）の三人は、お客の聲に應じて「ハイ玉葱と胡瓜」としげ子さんが差し出せば、「ハイ大根に大根」と復唱するお婆ちゃんやさんが差し出したものを見れば牛蒡と馬鈴薯だつたのでお客がどつと増える、といった具合に親切の中にもユーモアがあつて荷はまた、く間にさばけてゆく。所轄の警察で、あの店は親切ですよといつてくれたが、行列のお客、藤田さんに「このお店は何時もうですか」と問へば「八百屋さんは親切です」と答へてくれた。賣る者、買ふものに笑ひがあるところに頼もしい戦時下の明朗がある



とくぞのを下の表列陳の前の目ぐすがだ 屋百八なぼつ空は先居郷本——ぞすまき拉が表列陳 暮鈴馬にウドブ州甲なうさしいおてに面方



殆てつ断を客おは豪盤——で屋魚い近に地業二の街場工面方川荒の士戦業産—鑑—錦ばれけあを庫蔵冷にのるわてつ切き乾どんるわてしとうま流れ流に地業二てしり通素を口

すで方味、のもし正は察警濟經

○ 開行員を未然に防ぐやうに業者の代表と経済警察側の連絡が密められる



あそこは錦布問屋が閉で摘毀された。あの果物屋は賣情しみて取調べを受けた。二丁目の角の八百屋は公定價格違反で、その隣りの魚屋は情口販賣のかどで何れも罰せられた等々、直接、間接われわれの日常生活を不安にする根を絶やす刑事的な投目をしてゐるのは經濟警察である

また一方、**病人**が出た、至急
ば恐ろしいどころか、われ／＼日

に氷が欲しいとか、子供が多いし
配給米ではどうしても足りない等

等の場合、交番に申請すれば水の切符や應急米の切符などを發行して物資不足からくる公平な配給を行ふ行政的な面を支持つのも經濟警察である。この他に經濟界の動向を早く知るといふ特高警察の面をも持つてゐるが、世間には經濟警察は唯むやみに恐いといふ向もあるやうだが、違反さへしなければ恐ろしいどころか、われ／＼日

齊魯の創設

經濟警察がわが國に創設されたのは昭和十三年八月の上旬であつたが、この經濟警察が創設されるにつれて、はじめ或る方面に有力な反對意見があつた。警察に經濟界のことを左右させるのは、危險極まりないといふのであつたが、この反對意見も終に經濟の進歩につれて經濟界の現實をみてからは全く消滅したのである。當時なぜ經濟警察が急速に創設されなければならなかつたか、笑へない。話が東京市にある。

←
経済相談は月に十七、八万件にのぼつてゐます。警察を恐いものはりする人達はこの親切の面のあることも知つて黙きたい

法律は明二十九日でなければ有効でないで、現場を目前に見ながら何ら取替ることができなかった。しかし二十九日の午前零時には法に基づいて勝手取替つたが、その時には大半の品物は既に搬入済みであつたといふやうな法の精神に反したことを業者が堂々とやつてのけた問題があつた。

しかし經濟警察の取締りは、惡質、重大と認めた事件に對しては、飽くまでも喰ひ下がつて一年でも二年でも手を離さないといつた重點主義で臨み、その経過を期してゐる。その内容は一事件で百万圓であらうが、十圓、五圓の小さなものであらうが、惡質なものは大を問はずに徹底的に檢擧してゐる。

要するに公定價格以上で物を販賣したり、賣惜しみをしたりすることなどは、日常生活に非常な不安を生じさせる結果となるので、經濟警察當局は、國民生活の安定を期するため、生活必需物資が、回溜に配給されるやうにあらはる努力を傾けてゐる。





神宮御造營の萱場作りに

パラオから光榮の奉仕隊

聖なる汗に微笑む若者

撮影 橋本満寛

百八分を一手に引受け、故事部隊



爽やかな大氣を吸うて朝の健勝

聖地、伊勢の山田市から宮川の清流を遡ること三里餘り、標高五百メートル、五里山の中腹に、いま大日本青少年團員の手によつて神宮萱場造成勸業奉仕が行はれてゐます。この奉仕は、昭和二十四年に決り行はれる神宮御造營のための御造營に御屋敷を置き、まゐらせる音を栽培する特別の奉仕とする奉仕をいふのです。

この事業は、大日本青少年團が全國青少年たちの精神の基調である御神樂の念を、神事への奉仕によつていよく深め、聖業達成に挺身する眞の皇國民として銘記するために企てられたものです。

全國から選抜された光榮の奉仕者はその數三千三百名、これらの團員たちは約百名宛が三重縣度會郡小川郷村地内の宿舎に合宿して、交替に二週間の奉仕を行ひ、本年四月から明十八年六月までの間に美しい御造營用の萱場を作り上げようといふのです。

こゝには、いま京都府男女團員百餘名に混つて、遙々と赤道近いパラオ・サイパン、マリアの各島から馳せ参じた三十名の同胞の念、胸に叶つた感激の姿が見られ、内地部隊と南洋部隊が負けず劣らず作業にうちこむ勇ましい掛聲、斧の響き、紙の音が深い五里山中にこだましてゐます。



朝大五時起き出て國旗を掲揚

木の根と取組む萱地掘

マレー音頭

現地 ○○部隊 さがね生作詞
○○艦隊 軍楽隊作曲

Allegro 音頭風に且精かに（情を込めて朗らかに）

f *accel.* *raro.* *mf*

6 7 7 | 7 1 3 3 | 1 7 3 6 | 7 - | 0 6 7 1 | 7 6 4 7 | 6 4 3 1 |

マレー - はん - と - に さく - ら - は - ん - い -

3 - | 0 1 3 4 | 6 6 7 1 | 7 6 4 6 | 3 - | 0 6 4 | 6 7 6 4 6 | 3 4 3 1 | 7 - | 0 1 3 1 | 3 6 4 4 | 3 4 3 6 | 7 0 1 7 | 3 3 4 3 | 0 1 3 | 1 7 3 6 | 7 6 4 3 |

が りのたゆ - し - の りのたゆ - し - は やがてみとなるはなる ヤレホントは 家と - なる ズ

mf *Coda*

2.4. *f* *mf* *D.S.*

花を植まましよ櫻の花を
見事咲かせて世界の果てに
大和心の花吹雪
ヤレホントニ花吹雪

四

ゴムの青葉と櫻の花が
結ぶ心の誠と誠
永遠に榮の基となる
ヤレホントニ基となる

三

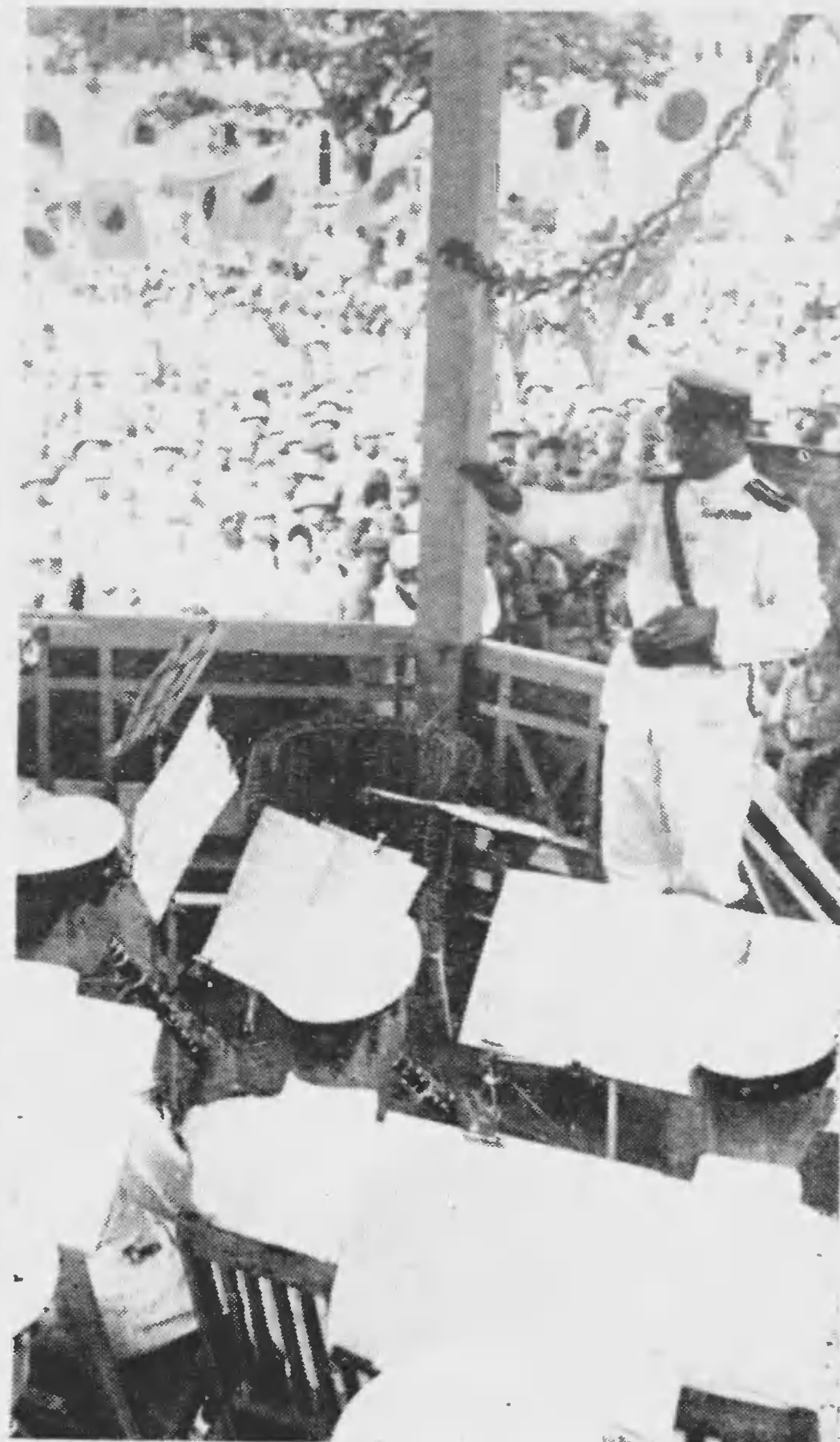
マレー半島に櫻はないが
昨日届いた故國の便り
母が願の八重櫻
ヤレホントニ八重櫻

二

マレー半島に櫻はないが
散つた勇士の護國の血潮
やがて實となる花となる
ヤレホントニ花となる

一

○ 廣場を埋める日本の兵隊さんや原住民
を前に演奏する我が現地海軍軍楽隊





マレーの俘虜 四

陸軍上等兵 竹森 一男 作

溝口は落葉が堆積してゐる小高いところを足もとに見た。おぼろな感覚ではあつたが、少し變に感じた。彼は殆んど何げなく、鎌田の足跡を踏まず、その落葉の上を踏みつけてみた。と、ど、ど、ど、といふ勢いで深い穴の中に滑り込んだ。あつといふ間もなかつた。

「しまった」と思つた。

「一番張りきつてゐるつもりで、誰よりもばんやりしてゐるではないか」と瞬間自鳴した。身を悶えてはひ上らうとした。木の枝と葉が重い足にからまつた。鉄を持つてゐる手には力がはいりなかつた。敵の穿に陥ちたやうな気がふとした。彼は満身の勇をふるつて背伸びをし、鉄を上にはふり上げた。そして勢ひ込んで攀ち登らうとした。

何故このやうなところに穴があるのか、彼には瞬間解し兼ねた。敵の戦場であらうか。靴で土をたゞき、踏み段を作らうとし、手で草を握つてゐるうちに、背中に冷汗が滲んで来た。猛獸の巢に陥込んだやうな恐怖が彼を追ひ立てた。彼は分隊の後尾に向つて大聲で呼びかけようとして口を開いたが聲は出なかつた。この浅間らしい恰

好を戦友に見せることよりも、失策した姿を隠しておきたい氣持があつた。彼はすぐ飛び出して、何げない顔をして後尾に追いつけるものと考へてゐたのである。一分、二分、それは實に永い時間であり、その時間が、まだ正確に心で計算されてゐる間、彼は希望を持つてゐたのだつた。しかし、それは大へんなことになつてしまつたぞと思つた。

溝口は猛烈として漸く地上に這ひ上つた。そしてわざと自分の愚しい失策を補整するために明朗に笑つてみたが、不安はすく胸を掻き亂した。もはや分隊の姿は見えなくなつてゐたのである。

ゴムの葉の茂り合つたすき間から月光が流れて、落葉や雜草をまはらに照らしてゐた。しかし一帯は殆んど暗く、猿や鳥の啼き聲が一帯の深さを表へてゐた。彼はたゞ分隊に續行しようとする心だけで大腿に歩いた。彼は全身に熱湯の汗を感じながら、先ほど分隊が通つていつた方向に急いだ。やがて笑ひ合つてゐる自分達の姿を悲しみの中でちらりと豫感しながら、聲も聞えず、僅か五分くらゐの間、

溝口は最も不幸な運命に導かれてしまつたやうな氣がした。彼は月の光の流れてゐるところで立止つた。そして時時計を眺めた。しかし徒勞であつた。どのくらゐ時間が経過したのか、彼は穴に陥込んだ時間を知つてゐたわけではなかつた。

彼は遂に「まだ希望を持つてゐたか」かすかな諦めの中に立つた。彼は目的のない足どりであるやうな歩みをしてゐたが再び立どまつた。そして茫々と地上をみつめ、それから空を徹つてゐるゴムの葉の茂りを眺めた。たゞ一人取り残された寂寥と、分隊を離脱した責任が、ひし／＼と迫るほど巨大な壓迫するやうなゴムの林であつた。ねばねばした液をひそめてゐる厚い真緑の葉の中から紅葉した葉が二、三枚はら／＼と散りかゝつた。彼はポケットからナイフを出し、根もと近く樹皮を削り取つた。眞白な木質の乳のやうな液が滲んだ。彼は拭き取つて、それを指と食指で弄んだ。ゴムの粘つた弾力が指をくすぐつた。彼は茫然としてゐたのだ。夫就に迷つたのだ。

こゝから東方に向つて進んでゆけば、最後の白い小路に出られることを考へた。彼は力無く踵を返した。が、再び弾かれたやうに逆轉して、もと来た道を進んでいつた。もはや分隊は彼を見捨てしまつたのだ。彼は泣き出しさうになつて突然佇んだ。そしてゴムの樹の根もとに腰を下ろした。昆虫が足もとで鳴いてゐた。體からは、すつかり力が抜けてしまつた。落着くために彼は煙草を取り出して煙すをすつた。その灯りは一入彼の心を寂しくした。

彼はやがて、夢遊病者のやうに、力なくゴムの樹に時々ぶつかりさうになつてもと来た方向に歩みを運んだ。そこに分隊員が溝口を捜すために引返すであらうことも考へてゐたのだ。

へられたからであつた。遂に彼は自分の失敗を戦友の誤みの中にさらすことに同意した。あの時、自分は同故鎌田を呼ばなかつたか、と後悔した。

溝口は、そのとき、近くに人の聲が聞えずかな喘ぎを聞いたやうに思つた。彼の頬は紅潮した。彼は勢ひよく立上つた。

「分隊員だ！」それは丁度、彼が陥込んだ穴のすぐ手前だつた。數名の人影が木立を縫つて近づいて来た。それは亂れた聲で、しかも一かたまりになつてゐた。

「これはおかしいぞ！」溝口はきよつとして眼を見張つた。今更ながら、自分がこのゴムの林中を歩いてゐるのは、分隊員を見送ることではなく、敵兵を捜索することではなかつたかといふ考へに突き當つた。

「あ、敵兵だッ」たしかに英人だつた。彼は本能的に數歩、跳びさうに前進して鉄を構へた。開張をいれず。

「誰かッ」と叫びつた。その聲は自分でも驚くほど大きかつた。虫の聲がハタと止つた。眼の前に見たのは、四名の背の高い英兵だつた。丁度月の光が射してゴムの葉蔭がちら／＼する中に、敵兵の顔があら／＼と見えた。頭の横に黄色い底のない軍帽をかぶり、折襟に半ズボンの淡黄褐色の制服を着て簡便な装束を着てゐた。それが肩を組み合はすやうにして立どまり、蓋手と溝口を眺めてゐた。

溝口は動轉してゐたが、超人的な力が溢れてゐることも知つてゐた。鉄はしつかり握り締められ、水のやうに、鎌田の足先が光つてゐた。相手の跳びかゝつてくるのを待つた。彼はじり／＼と進んだ。英兵は何等狼狽の色を示さなかつた。彼等は一歩

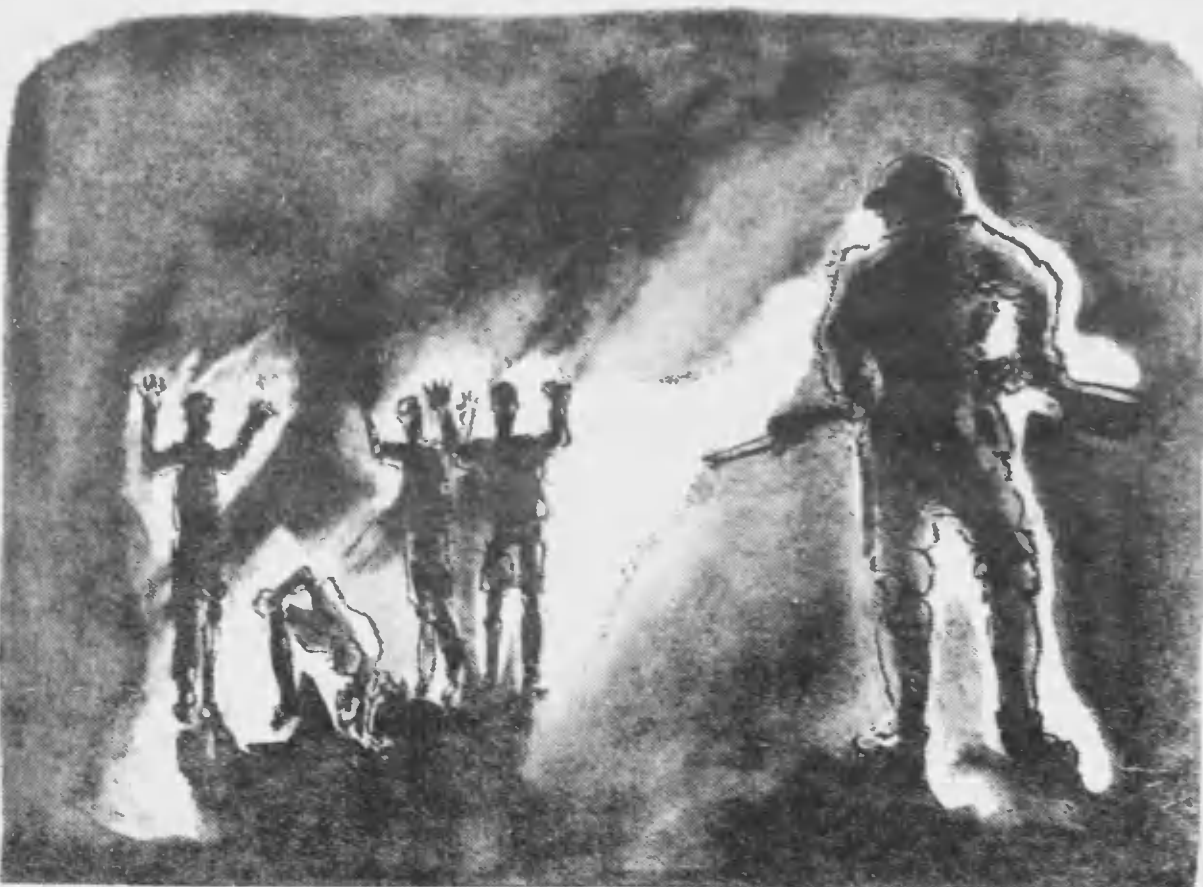
つけてやつた。彼の指に戦友の血がついた。『われ／＼は飢ゑてゐます』と再びフィリップは云つた。

『意氣地なしめ！』と溝口は日本語で云つて打つた。

『よし。めしは食へさしてやる。心配はないぞ。……しかし……朝、部落に掠奪に行つたのはお前達だ！』

彼は負傷した兵隊を指しながら、聲に白ひした。

いつか、強敵の戦合は溝口からまつてゐた。彼は、あまりに他愛ない英人の疲勞困憊した虚弱な姿を目前に見て、彼等が軍人であることを信じ兼ねた。しかし、英人の惡びれぬ態度は既に以前から日本軍に投降しようとしてゐたものに相違なかつた。ゴムの林中に袋の鼠となつた、といふより飢渴の苦しみに堪へかねて、一切の操度を放棄するに、さでない英兵を見た。敵に降伏しても生きてゐたいのではなく、ただ生きることの苦しさで我慢できなくなつたのに違ひない。この悲劇が彼等の表情にはつきりと現はれてゐた。溝口は鉄の安全栓を引いた。



進んで来た。その瞬間、彼の心の中に、打消すことの出来ない動搖が起つた。

いまや絶體絶命、たゞ一人で敵と對峙したのだ。最早や殘されてゐるものは決闘だけだつた。今、四人を相手に生死を決することとは彼にとつて意外であり、しかもものつづきならぬ事實となつた。

溝口の眼は飛び出すばかりに光り、一瞥、足もとに向けて威嚇の射撃をこゝろみた。かゝんといふ鉄聲はゴムの林中に響きわたつた。彼は槍をがかりとやつて、一足後に飛退いて、白兵の身構へをした。左右の者を叩き伏せ、怒聲を高く憤りに全身を跳き盡し、斬りまくる突き伏せ、うとする驚愕的な力に身を委せた。

『もし敗れたときは腹を切るのだ！』この考へが、閃いた。平和な輕い氣持で、大泉軍曹と話し合つた英人俘虜收容所の情景が、何故か鮮やかに彼の頭を通りすぎた。英人は立向つて来なかつた。恐ろしい空気が彼の頭を包みかした。

『え、もう一度！』と彼は叫んだ。彼は先程から、がなり立てたやうでもあるし、沈黙を守り續けたやうにも思つた。そして再び引金をぐつと引いた。真中の英人が足を抱いてぐたりと倒れた。

『十人でも二十人でも絶対に負けさうにはないぞ！』と溝口は思つた。血が蘇り、冷靜が取戻された。胸の動悸がさまつて、緩急なまでに白々しい勇氣が湧き起つてきた。彼は意外にも、四人の英人が兩手をあげて降伏してゐる姿をたしかめたのである。

なほと彼等の懇願するやうな態度の中にあつた。

『抵抗はしない。めしを食はしてくれ！』ともう一人の兵隊が云つた。

『ギヴ ミー！』といふ聲が、さうして溝口の耳に残つた。何日もこゝに居られて、食に飢ゑ、死ぬことも生きることも出来なくなつてゐたのだ。

『どんな苦痛でもします……』ともう一人が云つた。

『ちえッ、何で、馬鹿々々しい！』と溝口は思つた。

『よし！』とにかく跟いて来い！』と溝口はさう云つて、彼等の手に細綱をかけた。彼等はおとなしく隨つた。

その時、はるかより懐中電燈の光が流れ、慌だしく駆けつける人々のさわめきが聞えた。

『溝口！』と叫びかけた。正しく分隊員の聲であつた。

『おーい！』と、彼は如くに火を點けて、向を指示した。冷靜はさうして戻つた。

『お前達は、こゝにゐたのか！』溝口はやがて威嚇に満ちた聲で叫んだ。



浮屠は驚きもしなかつた。むしろ多數の兵隊を見て、世間るところまで落ちたといふ安心さへ、その顔色に盡いてゐるのだつた。恐らく、味方の軍人がさらに十數名多數であつたとしても、日本軍に追ひ詰められた彼等の精神は、既に切迫してゐたのである。一人の日本の兵隊は草率そのものの強力を發揮してあまりあつた。

落葉の堆積と見られたのは、波等の夜凍を凌ぐ假の霜の種子芽きの解凍だつた。そこには波等四名が、端の上にゴムの葉と麻袋を敷いて寝てゐたのだつた。

大皇帝陛下は俄然に機織の中を調査した。薬のないチュッコ機織機銃と弾倉が各一、大圓匙一、紫褐色の毛布一枚、アルミニウムの四角な飯食器と並等の私物品が若干あった。分隊員はそれ／＼これらの銃器を捜査し、私物品をとりまとめ、二つの麻袋に詰め込んで、それの中で最も丈夫な、絹の襦と一着若さうな美人に着がせた。チュッコ機織機銃は鴻雁が押した。かくて、一同は作庫を見守りながらゴム林を出たのだつた。

「たいどうしたといふのかね。すつかり面喰つた。……」銃聲が聞えたんで、つつき何事が起つたと思つて慌てたよ。随分探したあとだつたんで……」

大泉堂實はにこ／＼しながら溝口に話しかけた。二人は生頭を歩いた

『申しわけありません。すぐあとへ續けると思つて聲を出さなかつたのです。あゝと思ふ體もなく穴に陥込んだのです。速よくそこに彼等が隠れてゐたのでよかつたのですが、……………心配かけて……………』

溝口は顔を蔽らぬながら云つた

「ハ、ハ、ハ、いや、今になれば、それが天の導きだつたといふことになるな……………」

奴等は脚散、善着すにのこく出て来たんだらう」

「分りません。むしろ處を追跡したのかも知れません」

彼の手先は考へてすが、彼等は日本兵の機を疑ふつもりで追つて来たのではなくて、逆に潜伏するつもりで来たと思はれる筈があります。何故なら、われ／＼が境の邊を通つていったことと

う前から食ふに困つてゐたので、彼らに行つたのですが、町の治安は日本軍と提督して完全になつてゐるし、再びゴム林に居つたけれども前送が激減したるものなので、

「つ、このこと、今誰かたりはこれから自分で出して用やうと考へてゐたのかも知れませんが……」

「さういふのかね。ハ、ハ、ハ、さあ、どうかね、実外君の妹が如いたのかも知れんよ」

「はい、全然最初から敵對の様子が見えませんでした。僕はたつた一人になつてゐたものですから、一發ぶつ放してみただけです。ところが最初から意氣銷沈してゐたのです。しかし、いかに意氣銷沈したつて、投訴してまで生きようとする考へは分りませんね。どんな勞働でもするから、めしを食はしてくれと云ひました』

『軍人精神がないのさ。……………しかし君

はさうまで強しくつてもいいよ。君が一人で見え、一人で捕へたさ。」

いや、それは……。」と溝口は困惑して何言ふとはなしに頭を手をやつた。

「君はから離れて、たつた一人であつたまへるなんて、大した死動」と吉村が云つた。

「それ」は何のために、おんなに急いで、きよらゝ歩いてゐたのか、恥かしくなるよ」と榎本が云つた。

「美の聲が後から」傳つて来た。溝口

は面喰つた。今日の出勤の目的は、その消
程がどうあらうと結果として成功し、その
目的を達したのだつた。諸口はしかしくど
ぐつた。氣持だつた。自分一人が武動を喜
て、怪力を引き連れて悠々歸還してゐる
等と、英雄的な氣持になることは出来なかつ
た。たゞ彼の心を秘かに知れてゐるもの
のは、生命の危機に際して、この自分の肉

といふ事實をたしかめたことだつた。俘虜兵は前と後に挟まれて歩いてゐた。フイリップは負傷兵の手を肩から掛け、引きずるやうにして歩いてゐた。ゴム園を出

て椰子の林を抜け、サンパンに乗つたとき、月はぐんぐ西に動いて、何かに追いつて立てられるやうに密林の中に沈んでいつた。一同の胸の中には任務を終へ、しかも俘虜を獲して意氣揚々と歸還する者の、誇りに満ちた歡びがあふれてゐた。

大泉軍曹は誰にも手をかざさず、自ら煙をあやつつた。靜かな流れはびた／＼と船腹に當つてくだけ、船は左右に動揺しながら、河の真中に漂つた。月は急速に密林に落ち、その橙色の圓球は動くに随つて大きくなつた。巨大な月がその姿の半身を落したとき、蹣々とした河は次第に白色の霧を浮べて明けゆく光をゆらめかし始めた。既に

東方では樹木の中から淡紅色の雲が蠢き出したのである。星は薄れ、月は太陽に追はれるやうに沈んでいつたが、まだ地上には仄暗かつた。しかし既に夜が明けて新らしい朝が訪れてゐることを告げて、更生の歡喜を唄ふ南洋のすが、もはや民家の早寝や、パイアの梢に現はれて、絶え間なく美しい夜で囁つてゐた。それは、お互が沈黙を守り、夜のさまじな聲が途絶えた爽やかな五時の静寂の中に聞えたので、一同は思

はず耳を^{もた}てたのだつた。俘虜兵は自分の運命の^{かわつ}奇望さの中からその微妙な聲を聞きとつて、複雑な感動に震はれてゐるしかつた

彼等にとつては全く夢であらう。敵兵に捕はれてサンパンに乗り、曙にもの想ふ氣持は、想像も出来なかつたことであらう。

満口にしても、會社員生活の長い習慣か

も今、英軍停戦を擁してサンパンを操つてゐる。一瞬前の運命は、人間心理の経験し得る最高の秘密を突破したのであつた。しかも今、身も心も平穩に、南洋鶯の聲に

恍惚と聞きほれてゐるとは、夢でなくて何であらう、もしもこれが逆の立場であつたなら、日本人はこの屈辱に堪へ切れぬに違ひない。日本人は一兵にならうとも、腹を切るまで、決戦するだらう。一同がサシパンを降りると、マンビンタエは最前から岸に立つてゐて

『フーイングリッシュ・ソルチャーだ。萬歳！』と叫んで、昂奮しながらその邊りを二、三回くると廻つたが、凄じい勢ひで派出所に戻つていつた。アブラ・モハ・ハシム所長は大慌てに慌てゝマンビンタエに伴はれて出迎へた（つゞく）

思想戰といふ言
葉がよく用ひられるやうになつたが、果し
てはなんらの意味で理解されてゐるでせう
か。大東亞戦争も究極においては、思想と
思想の戦ひ、思想戦なのです
そこで情報局では、選集誌上に『思想戦
讀本』を連載し、いろ／＼の角度から、思
想戦の意義、目標等を明らかにすることに
しました。是非御一讀下さい。

思想戰讀本 週報連載中

思想戦とは何か。最近、思想戦といふ言葉がよく用ひられるやうになつたが、果してほんたうの意味で理解されてゐるでせうか。大東亞戦争も究極においては、思想と思想の戦ひ、思想戦なのです。

そこで情報局では、週刊誌上に『思想戦讀本』を連載し、いろ／＼の角度から、思想戦の意義、目標等を明らかにすることにしました。是非御一讀下さい。

を跡の勳武の様父お
いやしつらいて見

東條總理滿洲へ立つて遺児を激勵

建國十年を壽ぐ國葬
滿洲國の慶祝式典に招
かれて列席した「滿洲
建國功勞者遺兒團」の
一行百五名の遺兒達は
帝都出發に先立つて、
東條總理の激勵と訓示
を受けました。聲々と
結父のやうに訓し勵ま
す總理の聲は、父を兄
と、樂土滿洲建國の人
柱として擡げたこれら
遺兒達の胸には愛兒の
族立ちをさとす眞の父
の、兄の聲とも響き、
まだ見ぬ懐れの大陸、
父兄武勳の跡へと思ひ
をはせるのだつた

新中國を導く青年学徒

實踐に移された「新國民運動」

新生中國の決戦體制、「新國民運動」は大東亞建設の一翼を分擔するに相應しい中國を建設するために、かつて蔣介石の抗日宣傳や孫中山の思想にのみた中國民族を根本からたゞ直して清新剝刺の新國民を作り、日華一心同體、中國復興、東亞保衛の實をあげる運動です。

汪精衛氏はこの運動をもつて中國指導の根本指針とする一方、これを通じて大東亞戦争への協力、つまり戦争遂行に適應する日本に對し日華不可分の關係をいやが上にも固くして中國の戦後役割を徹底的にはたすことを述べてゐます。それだけにこの運動の成果如何は明日の中國の運命をも決する重大な役割を持つてゐるわけで、その實行にあたつては氏自ら運動促進委員會の委員長となり、一大運動の陣頭に身をすゝめるほど熱心に指導に當つてゐます。さてこの新國民運動はまづ青年、學生層の訓練に



女子軍もその日の訓練に参加、新生中國の前途を身をもつて體驗した



重點を置き、これによつてさらに一般民衆に普及させることになつてゐます。即ち小學四年から中學三年までを童子軍とし、中學四年から大學生までを青年團、別に運動の挺身隊として中國青年模範團が組織され、この十一月から實踐訓練に入ることにになりましたが、これら青少年の育成を目指す青少年團の組織や實踐内容は、まづ大日本青少年團がお手本になつてゐます。

實踐内容は集團訓練の下に、軍事公、清潔潔白、誠實、剛毅、勤儉節約、努力奉仕など東洋古來の道義が強調され、日々の手近な生活の刷新から着目して建設する理想を包含してゐます。今や中國青年革新の體制は成りました。

我々日本の青少年も友邦中國の同志とガツリ腕をくんで戦争目的の完遂に邁進しようではありませんか。

こゝに紹介したのは青年團の第一着手として全國大學生中の優秀なものを選抜し、新國民運動の指導者基本幹部とするため夏休みを利用して炎熱下の榮金山麓に幕営、指導推進力としての精神的、肉體的訓練を實施した「全國優秀大學生暑期訓練」の活動状況です。

撮影 支那派遣軍報道部

汪精衛氏は訓練場に新國民運動の根本思想をじゆん／＼と説けば訓練生は奉公の誠を盡くす言葉を續きあげた

天幕生活も軍營的訓練の一つだ、これによつて飽同の精神が養はれる

筋肉勞働は苦力のするものと異なり、健康の訓練は破られた。中國の最高教育をうけた優秀大學生が軍先遣隊の補給に當る

今日は耐熱行軍、榮金山麓の山道を隊伍を率ゐる下だ



豊年満作を一刻も早くお国の穀倉へ

埼玉縣早稲田村

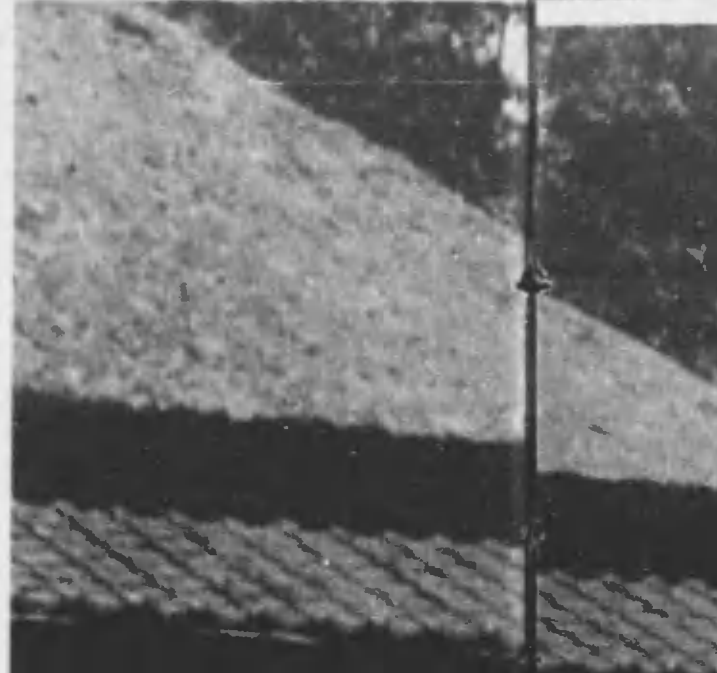


九月、十月は前年度のお米が無くなる時期です。それでも今年はお米の出廻りがよくいつてゐる上に、外米も順調に入つてゐるので、この分なら今年の増産期は何の心配もなく通り過ぎるの見込です。食糧増産の奨励、食糧増産の施設と大戦下の食糧政策に寸分の手抜きもないうやう努力してゐる農林省では更に、今年はお米の買上げが例年より早目に行ふことになり、十月十日までに供出されたお米については石當り六十錢、十月末日までの分には四十錢の兼荷金証書を交付して、早稲田地方を中心に全国から出るお米だけ早く出来るだけ澤山の新米を供出してもらふことになりました。

帝郷の台所を水はる埼玉縣は全国でも屈指の早稲米の産地ですが、なかでもその名が示すやうに北葛飾郡の早稲田村は利根川の豊かな支脈に育まれて一望早や黄金の波、村をあけて取入れの最中です。人手や肥料の不足も克服したお百姓さんたちの不屈の努力と上々の好天候に恵まれて、例年になく豊年満作が豫想されてゐる早稲田村には、いまひたすら聖恩に應へまつらんとする村人たちの熱心な姿が見られ、内地産米豫想七千万石の魁として、一億希望の足る米俵は、どしどしとお國の穀倉を日さして積み出されてゐます。



一年間の努力の結晶は眺めていとほしうもなく豊年満作へ



見事検査にも合格して、お國の穀倉を押し進め



収穫も多かったがみいりも多かった。通帳を手にしてお米は額を伸ばせる



宣
真
通
報
昭和十七年十月十一日
第
一
次
抽
籤
日
昭和十七年九月十一日發行
第
一
次
抽
籤
日
昭和十七年九月十一日發行



第 8 回
特別國債券
賣出十月一日 → 十月卅日

大藏省・逓信省・日本勸業銀行

内閣印刷局印刷發行

(外務省・A4 郵便定規より大の寄本)